
短編小説 花火

くりこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編小説 花火

【Zコード】

N3158V

【作者名】

くりこ

【あらすじ】

花火を題材にしたショート作品です。保育士ミナが園児に見せた

花火は…

後味ほのぼのしていただけたら嬉しいです。

他サイトにて掲載していた作品を転載しています。

登園時の慌ただしさも一段落した、いつもの朝。

保育士のミナは、着席した園児達へ「じゃあ今日はお絵描きをしま
しょうね」と声を張った。

昨夜は地元で花火大会があった。

特に課題は決めなかつたが、子供たちにはまだ鮮やかな残像がある
らしい。

小児な画家達は色とりどりのクレヨンを握り締め、白くて四角い
夜空へめいめい花火を打ち上げる。

室内を見回っていたミナは、伶くんの画用紙を手にするや否や足が
止まる。

伶くんはなんとキャンバスを真っ黒に塗りつぶしていたのだ。

ギョッとしたミナは膝を折り、険しい顔の小さな彼を覗く。

思ひあたる節もあるから、オブラー^トに包み遠回しに尋ねた。

「伶くん。何の絵を書いてるの？ もしかして、まさかの……海苔
？」

ミナのつまらないジジョークなど無視し、伶くんはムスツとしたま
ま口をとがらせる。

「父ちゃん仕事で、連れて行つてくれなかつたもん！ 花火、ベラ
ンダからも見えなかつたもん！」

今にも泣き出しそうな彼に、ミナの胸は塞がる。

伶くんの家は父子家庭だ。

いつも閉園時間、ギリギリで駆け込む、額に汗したスーツ姿の父親が
田に浮かぶ。

ミナは伶くんの頭を優しく撫ぜた。

「よしそー。じゃあ代わりに先生が、伶くんのお空へ花火を上げて
もいい？」

怜くんがキヨトンと見上げる。//ナニニシココと笑つて見せた。

「ヒュウーー、ドッパンッ！」

効果音を演出しつつ。

ミナの手により、漆黒の闇夜に、極彩色の火花が舞う。

ピンクや黄色の色水が点々とちりばめられると、まるでそれは花火のよう見えた。

にわか花火師が、夜空に見立てた紙へ向つて絵の具を含ませた筆をしごく。飛沫はまるで、スターマインのような花を次々に咲かせていった。

怜くんが田を輝かせて歓声をあげた。

迎えに来た怜くんの父親が、息子から経緯を聞き、恐縮しつつミナへ絵の礼を贈る。

「なんか、ありがとうございました。最近仕事が忙てこんで……中々「イツのことを構つてやれずに……」

花火の絵を大事そうに抱えた怜くんが、ふいにとある告げ口をミナへする。

「父ちゃんねえ。本当はミナ先生と花火行きたいって言つてたんだよ。先生のこと可愛」「——って、いつも父ちゃん……」

「わあーっ！ じりじり、怜っ！」

慌てて息子の口をふさぐ父親。しかし手を振りほどいた怜くんは父へ叫んだ。

「でも、父ちゃん駄目だよ！ ミナ先生はボクのお嫁さんになるんだもん！ ボクのほうがずっとずっと、先生のこと好きなんだっ！」

「

親子喧嘩を始めた二人へ、ミナは思わず吹き出す。

花火大会はシーズンたけなわだ。来週は隣り街でも開催される。

三人で見上げるだらう夜空を想う。ミナはそこへ、キラキラと輝

く花々を描いていた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3158v/>

短編小説 花火

2011年10月8日19時13分発行